

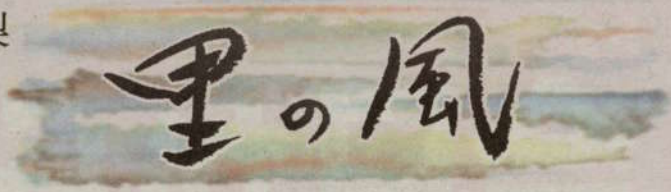
「東京からヨメに来て農業なんて、さぞきつかるう」と周囲の人によく言われる。「ほかの仕事だつてきつかですよ」と答えているが、事実その通りだろう。満員電車での通勤や残業、転勤。会社勤めの方が楽だとはどうしても思えない。逆に農業の方がストレスは少ない気がしている。それどころか、農業を始めてから感動することが多くなった。

農作物ができたときの感動はもちろんだが、近所の人たちの心遣いや一言に感動することも多い。また、景色の美しさにもよく感動する。阿蘇五岳の雄大さだけでなく、朝露やクモの巣といった小さなものにも感動する。刈り取った稲の小積みや掛け干しなど、人の手が入った農村の風景もまた美しい。

こうした身近な自然や農村の美しさを大切にしていきたいという思いから、「南阿蘇ランドアートクラブ」というサークルを仲間た

南阿蘇

吉田 愛梨



里の風



ちとつくった。ランドアートとは「山や川、海岸など、自然環境の中で周囲の風景を生かしながら木や石などの自然素材を使って表現する芸術」と定義されている。自然の中で人工的な素材を使って作

芸術の秋 食欲の秋

品を作るアーティストもいるが、私たちは素材そのものも自然の中にあるものを使って、農村の美しさを際立たせることができるような創作活動ができれば、と考えている。



絵・有働 孝昭

サークル結成後初の活動として、たまご拾い牧場という所でイベントを行った。題して「LAND & ART」(大地からの恵み)。地元陶芸家の指導を受けながら土鈴を焼いたり、竹で半円状のドームを作ったり、鶏の羽で「鶏マント」をつくったり。参加者と一緒に創作活動を楽しんだ後は、自分たちで鶏をさばき、竹筒でご飯を炊いておなかを満たした。芸術の秋と食欲の秋にぴったりイベントだった。

「農業×タイヘン」だけではないうんなに楽しいことができる、という感触をつかめた貴重な体験となった。農業といえども機械での作業が増え、昔に比べると少しは時間に余裕ができたはずである。農作業の合間を縫ってランドアートに取り組むことで、自分たちも楽しみながら、農村という素晴らしい空間をアピールできるような活動を続けていければ、と思っているところだ。(おあしす米生産者、NPO九州バイオマスフォーラム理事長)